

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

岩滑新田の村に巳之助という十三の少年がいた。

巳之助は、父母も兄弟もなく、親戚のものとしてひとりもない、まったくのみなし子であった。そこで巳之助は、よその家の走り使いをしたり、女の子のように子守をしたり、米をついてあげたり、そのほか、巳之助のような少年にできることならなんでもして、村においてもらっていた。

けれども巳之助は、こうして村の人々のお世話で生きてゆくことは、ほんとうをいえばいやであった。子守をしたり、米をついたりして一生を送るとするのなら、男とうまれたかいたがないと、つねづね思っていた。

男子は身を立てねばならない。しかしどうして身を立てるか。巳之助は毎日、ご飯を食べてゆくのがやつのことであった。本一さつ買うお金もなかったし、またたといお金があつて本を買ったとしても、読むひまがなかった。

身を立てるのによいきっかけがないものかと、巳之助はこころひそかに待っていた。

すると、ある夏の日の昼さがり、巳之助は人力車の先綱をたのまれた。

そのころ岩滑新田には、いつも二、三人の人力ひきがいた。潮湯治（海水浴のこと）に名古屋からくる客は、たいてい汽車で半田まできて、半田から知多半島西海岸の大野や新舞子まで人力車でゆられていったもので、岩滑新田はちょうどその道すじにあたっていたからである。

人力車は人がひくのだからあまりはやくは走らない。それに、岩滑新田と大野のあいだには峠が一つあるから、よい時間がかかる。おまけにそのころの人力車の輪は、ガラガラと鳴る重い鉄輪だったのである。

そこで、急ぎの客は、賃銀を倍だして、ふたりの人力ひきにひいてもらうのであった。巳之助に先綱ひきをたのんだのも、急ぎの避暑客であつた。

巳之助は人力車のながえにつながれた綱を肩にかついで、夏の入り陽の A 照りつける道を、えいや

えいやと走った。なれないこととてたいそう苦しかった。しかし巳之助は苦しさなど気にしなかった。好奇心でいっぱいだった。なぜなら巳之助は、ものごころがついてから、村を一步も出たことがなく、峠の向こうにどんな町があり、どんな人々が住んでいるか知らなかったからである。

日がくれて青い夕やみの中を人々がほの白くあちこちするころ、人力車は大野の町にはいった。

巳之助はその町でいろいろなものをはじめて見た。軒をならべてつづいている大きい商店が、第一、巳之助にはめずらしかった。巳之助の村にはあきない屋とは一軒しかなかった。駄菓子、わらじ、糸くりの道具、こうやく、貝がらにはいった目薬、そのほか村で使っていたいのものを売っている小さな店が一軒しかなかったのである。

しかし巳之助をいちばんおどろかしたのは、その大きな商店が、一つ一つもしている、花のようにあかるいガラスのランプであつた。巳之助の村では夜はあかりなしの家が多かつた。まっ暗な家の中を、人々はめくらのように手でさぐりながら、水がめや、石うすや大黒柱をさぐりあてるのであつた。すこしぜいたくな家では、おかみさんが嫁入りのとき持ってきたあんどんを使うのであつた。あんどんは紙を四方にはりめぐらした中に、油のはいったさがあつて、そのさらのふちにのぞいている灯芯に、さくらのつぼみぐらいの小さいほのおがとると、まわりの紙にみかん色のあたたかな光がさし、付近はすこしあかるくなったのである。しかしどんなあんどんにしろ、巳之助が大野の町で見たランプのあかるさにはとてもおおばなかつた。

それにランプは、そのころとしてはまだめずらしいガラスでできていた。すすけたり、やぶれたりしやす

1-1

い紙でできているあんどんより、これだけでも巳之助にはいいもののように思われた。

このランプのために、大野の町ぜんたいが竜宮城かなにかのようにあかるく感じられた。もう巳之助はじぶんの村へ帰りたくないとさえ思った。人間はだれでもあかるいところから暗いところへ帰るのをこのまないのである。

巳之助は駄賃の十五銭をもらうと、人力車とも別れてしまつて、お酒にでも酔つたように、波の音のたえないこの海辺の町を、めずらしい商店をのぞき、美しくあかるいランプに見とれて、さまよっていた。

呉服屋では、番頭さんが、つばきの花を大きく染め出した反物を、ランプの光の下にひろげて客に見せていた。穀屋では、小僧さんがランプの下で小豆のわるいのを一つぶずつひろい出していた。またある家では女の子が、ランプの光の下に白く光る貝がらをちらしておはじきをしていた。またある店では、こまかい珠に糸をとおして数珠をつくっていた。ランプの青やかな光のもとでは、人々のこうした生活も、物語か幻灯の世界のように美しくなつかしく見えた。

巳之助は今までもなんども、「文明開化で世の中がひらけた。」ということを書いてきたが、今はじめて文明開化ということがわかつたような気がした。

歩いているうちに、巳之助は、さまざまなランプをたくさんつるしてある店の前にきた。これはランプを売っている店にちがいない。

巳之助はしばらくその店の前で十五銭をにぎりしめながらためらっていたが、やがて決心してつかつかとはいっていった。

「ああいうものを売ってくれや。」

と、巳之助はランプをゆびさしていった。まだランプということばを知らなかつたのである。

店の人は、巳之助がゆびさした大きいつりランプをはずしてきたが、それは十五銭では買えなかつた。

「まけとくれや。」

と、巳之助はいった。

「そうはまからん。」

と、店の人は答えた。

「おろし値で売ってくれや。」

巳之助は村の雑貨屋へ、つくったわらじを買ってもらいによくいったので、ものにはおろし値と小売値があつて、おろし値は安いということを知っていた。たとえば、村の雑貨屋は、巳之助のつくったひょうたん型のわらじをおろし値の一銭五厘で買いつつて、人力ひきたちに小売値の二銭五厘で売っていたのである。

ランプ屋の主人は、見も知らぬどこかの小僧がそんなことをいったので、びっくりしてまじまじと巳之助の顔を見た。そしていった。

「おろし値で売れて、そりゃ相手がランプを売る家ならおろし値で売ってあげてもいいが、ひとりひとりのお客におろし値で売るわけにはいかな。」

「ランプ屋ならおろし値で売ってくれるのイ？」

「ああ。」

「そんなら、おれ、ランプ屋だ。おろし値で売ってくれ。」

店の人はランプを持ったまま笑いだした。

「おめえがランプ屋？ はッはッはッはッ。」

「ほんとうだよ、おツつあん。おれ、ほんとうにこれからランプ屋になるんだ。な、だからたのむに、きよ

1-2

うは一つだけんど、おろし値で売ってくれや。こんどくるときや、たくさん、いっぺんに買うで。」

店の人ははじめ笑っていたが、巳之助のしんけんなように動かされて、いろいろ巳之助の身の上をきいたうえ、

「よし、そんならおろし値でこいつを売ってやろう。ほんとはおろし値でもこのランプは十五錢じゃ売れないけど、おめえの熱心なのに感心した。まけてやろう。そのかわりしつかりしうばいをやれよ。うちのランプをどんどん持ってって売ってくれ。」

といって、ランプを巳之助にわたした。

巳之助はランプのあつかい方をひととおり教えてもらい、ついでにちょうちんがわりにそのランプをともし、村へむかった。

藪や松林のうちつづく暗い峠道でも、巳之助はもうこわくはなかった。花のようにあかるいランプをさげていたからである。

巳之助の胸の中にも、もう一つのランプがともっていた。文明開化におくれたじぶんの暗い村に、このすばらしい文明の利器を売りこんで、村人たちの生活をあかるくしてやろうという希望のランプが――。

巳之助のあたらしいしうばいは、はじめのうちまるではやらなかった。百姓たちは、なんでもあたらしいものを信用しないからである。

そこで巳之助はいろいろ考えたあげく、村で一軒きりのあきない屋へそのランプを持って行って、ただで貸してあげるからしばらくこれを使ってくださいとたのんだ。

雑貨屋のばあさんは、しぶしぶ承知して、店の天井ように釘をうってランプをつるし、その晩からともした。

五日ほどたつて、巳之助がわらじを買ってもらいにくと、雑貨屋のばあさんはこにこしながら、こりゃたいへん便利であかるうて、夜でもお客がよきてくれるし、つり銭をまちがえることもないので、気に入ったから買いましょう、といった。そのうえ、ランプのよいことがはじめてわかった村人から、もう三つも注文のあったことを巳之助にきかしてくれた。巳之助はとびたつように喜んだ。

そこで雑貨屋の婆さんからランプの代とわらじの代を受けとると、すぐその足で、走るようにして大野へいった。そしてランプ屋の主人にわけを話して、足りないところは貸してもらい、三つのランプを買ってき、注文した人に売った。

これから巳之助のしうばいははやってきた。

はじめは注文をうけただけ大野へ買いにいったが、すこし金がつまると、注文はなくてもたくさん買いくんできた。

そして今はもう、よその家の走り使いや子守をすることはやめて、ただランプを売るしうばいだけにうちこんだ。物干台のようなくのついた車をして、それにランプやほやなどをいっぱいづるし、ガラスのふれあうすずしい音をさせながら、巳之助はじぶんの村や付近の村々へ売りにいった。

巳之助はお金ももうかったが、それとは別に、このしうばいがたのしかった。今まで暗かった家に、だんだん巳之助の売ったランプがともってゆくのである。暗い家に、巳之助は文明開化のあかるい火を一つ一つともしてゆくような気がした。

(新美南吉「おじいさんのランプ」より)

1-3

※(注) たいい――「たとえ」の古い言い方。

人力車――人を乗せて、人力で走る二輪車。

先綱――「先綱ひき」のこと。人力車のながえにつけた綱を引っぱって人力車を動かす。二人で人力車を動かす時は、一人はながえを持ち、もう一人はこの綱を持って引っぱった。

ながえ――人力車の前に長く平行に出した二本の棒。ここを持って人力車を動かす。

こやく――ぬり薬やはり薬。

あんどん――木などで枠を作って紙を張り、中に油皿を置いて点灯するもの。

銭――昔のお金の単位。

問一――線①「身を立てる」とは、「社会的に高い地位について名声を得ること」という意味です。このことを言い表した次の四字熟語の□にあてはまる漢字二字を答えなさい。

立身□□

問二――線②「巳之助は人力車の先綱をたのまれた。」とありますが、巳之助は岩滑新田からどこまで人力車をひくことになりましたか。文中からぬき出して答えなさい。

問三――□ Aにあてはまる最も適当な語を次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア くらくら

イ めらめら

ウ じりじり

エ てかてか

問四――線③「これ」の指す内容を、解答らん「こと」につながるように、文中から十字以内でぬき出して答えなさい。

問五――線④「竜宮城かなにかのように」とありますが、これはどのようなことをたとえた表現ですか。適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 大野の町の人々が、みんな明るい性格であること

イ 大野の町の雰囲気、夜でも明るくはなやかなこと

ウ 大野の町の建物が、どれも派手でぜいたくなこと

エ 大野の町の明かりが、一日中ついていること

問六――線⑤「こうした生活」の指す部分を文中からぬき出し、その初めと終わりのそれぞれ五字を答えなさい。(句読点も字数に数えます。)

1-4

問七 — 線⑥「今ではじめて文明開化ということがわかったような気がした。」とありますが、巳之助が「今ではじめて文明開化ということがわかったような気がした」のはなぜだと考えられますか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 文明開化の象徴といえるランプによって、人々の生活が豊かになったのを間近で見たから。
- イ 文明開化の産物といえるランプの光が、貧しい人々を救う場面を目撃したから。
- ウ 文明開化の名残といえるランプの光の中に、美しくなつかしい故郷を思い出したから。
- エ 文明開化の始まりといえるランプが、物語の中のような世界を現実の世界にもたらしたから。

問八 — 線⑦「いろいろ巳之助の身の上をきいたうえ」とありますが、ランプ屋の主人は巳之助からどのような「身の上」話をきいたと考えられますか。話をきいた後のランプ屋の主人の反応をふまえ、できるだけ文中の言葉を使って、解答さんの「こと」につながるように、五十文字以内にまとめて答えなさい。

問九 — 線⑧「希望のランプが——。」とありますが、「——」にはどのような言葉が省略されていると考えられますか。文中からぬき出して答えなさい。

問十 — 線⑨「あげく」の意味として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 苦しまざれに
- イ 仕方なく
- ウ けれども
- エ その結果

問十一 — 線⑩「村で一軒きりのあきない屋へそのランプを持っていって、ただで貸してあげるからしばらくこれを使ってくださいとたのんだ。」とありますが、巳之助があきない屋のばあさんに「ただで貸してあげるからしばらくこれを使ってください」とたのんだのはなぜですか。答えとなる次の一文の□にあてはまる言葉を考え、二十五文字以内で答えなさい。

村人が集まる雑貨屋で使ってもらえば、□と考えたから。

1-5

問十二 — 線⑪「ランプ屋の主人にわけを話して」とありますが、巳之助はランプ屋の主人にどのような話をしたと考えられますか。適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア さつそくランプが一つ売れて、新たに三つ注文が入ったが、自分には仕入れに十分なお金がないという話
- イ 雑貨屋の婆さんがランプをとても気に入らないうえ、ランプを店に置いて売ってくれることになったという話
- ウ 村人たちにランプを貸したことで、ランプを買い取ると考える村人が増えてきたという話
- エ 多くの村人にランプを売れば、巳之助と主人の二人で大もうけができそうだという話

問十三 — 線⑫「巳之助はお金ももうかったが、それとは別に、このしょうばいがたのしかった。」とありますが、巳之助がこのように感じたのは、ランプを売るにあたってどのような思いがあったからですか。解答さん「という思い」につながるように、文中から十五文字以上二十文字以内でぬき出して答えなさい。

二次の文章Ⅰ・Ⅱを読んで、後の問いに答えなさい。

Ⅰ A

人類はさまざまなエネルギーと技術を駆使して文明を進歩させ、物質的に豊かな、そして便利な生活を実現して来たのですが、同時に、^①不可避的に、自然環境を変えて来ました。

人類の生活と自然環境を革命的に変える発端は、約一万年前の「^②農耕牧畜革命」ですが、急激に変えるきっかけになったのは、十八世紀半ば、イギリスで起こった「産業革命」です。この「産業革命」以降、人類のエネルギーの使用量は激増しました。これは、産業が使用するエネルギーの増加とともに、人口増加の影響が重畳された結果です。人口が増えれば、使用されるエネルギーの総量が増加するのは当然ですが、加えて、「一人当たりの消費量」の急激な増加が相乗されているのです。

ヨーロッパでは十六世紀中頃以降、森林資源の枯渇、^③欠乏、薪炭不足に伴う深刻なエネルギー危機に襲われており、このエネルギー危機を救ったのが石炭でした。

エネルギー源を薪炭に頼るならば、その使用量に自ずと限界があります。限られた土地の中で、伐採、植林、育成という数十年の自然のサイクルを繰り返さなければならぬからです。ところが、自然が数千万年、数億年という長い年月を経てつくった化石燃料である石炭や石油は掘ればいくらでも出て来る（と思う）のです。そして、その埋蔵量が^④あたたかも無限であるかのように錯覚し、人類は自分たちの欲望を果てしなく膨らませて来たのでした。

人類の「産業革命」を契機に自然環境は急速に悪化するのですが、自然環境が革命的に悪化し始めたのは、遠く、およそ一万年前の「農耕牧畜革命」の時でした。それまでの、およそ四百万年という長い期間、自然の中で狩猟採集生活を営んでいた人類は、農耕牧畜という食糧の新しい計画的生産方法を発明するに及び、それまでの自然環境を、人間に都合のよいように「^⑤改変」する必要に迫られたのです。

採し畑や放牧地にしたのですが、それは、結果的に「自然破壊」につながる運命にありました。

1

1-6

抱えています。これらはいずれも、人類を含むあらゆる生物の生態系の急激な変化、破壊を意味するもので、地球上のすべての生物の生存をも危うくする深刻な問題です。

II B

近年、地球の自然環境破壊、「温暖化」などが「地球的規模」の問題になっていきます。そして、地球にやさしいや環境にやさしいをキャッチフレーズにする企業や商品が増えていきます。

たとえば、『広辞苑』の「やさしい」に、「肌（はだ）にやさしい洗剤」という例文を掲げた「悪い影響を及ぼさない」という説明が加わったのは一九九八年発行の「第五版」からです。2、キャッチフレーズとしての「地球にやさしい」、環境にやさしいは、ともかく、客観的事実として、ここに挙げられる「さまざまな商品」が、程度の差こそあれ、地球や環境に「悪い影響を及ぼさない」はずはないのです。キャッチフレーズの「やさしい」の本当の意味は「害はある、しかし、いままでのよりよりは害が少ない」ということなのです。③、そもそも、本来は、地球や環境に「やさしく」してもならなければならない人間が、地球や環境に「やさしく」などというのは、分をわきまえない人間の傲慢にも思えます。

さかのほれば、十八世紀半ばのイギリスにおける「産業革命」以来、人間の生活も世界も、したがって人間自身も、3 まるくしく変化しました。人類はエネルギー源を家畜から火力、水力、原子力へと助け、幾多の科学的発見、技術的発明を土台に、高度の機械・物質文明を築き上げました。これは「文明の進歩」であり、「進歩」を支えたのがさまざまなエネルギーです。

いまでも原始時代さながらの生活を続けている「未開」の部族をノゾいて、私たち人類は、この「文明」の恩恵に浴して来たのです。とりわけ、アメリカや日本をはじめとする「先進国」の現代人が、好むと好まざるとにかかわらず、その恩恵なくしてはもはや日常生活を送ることも、社会活動を行うこともできなくなっていることは事実でしょう。

視点を変えてみれば、「文明の進歩」の歴史は一貫して地球にやさしくなかつた歴史です。「文明の進歩」と「エネルギー消費量」との間には比例関係がありますが、化石燃料の消費、文明の利器が急速に進む以前は、地球は人間の存在に比べて圧倒的に巨大でしたから、人間は自分たちの存在が地球にやさしくなく、ことに気づかなかつただけです。さらに、文明、とりわけ医学・医療技術が進歩し、人類が自然淘汰されにくくなった頃から、人類は一層、地球にやさしくなくなつたのです。人類が、化石燃料などというものを知らず、また「文明」の恩恵などに浴さず、地球上のすべての生きものが自然淘汰の原則に従っている間、地球は健康だったのです。

人類が、自分自身の力の何十倍、何百倍もの大きな力を発揮する蒸気機関を発明し、産業が「革命的」に発達しはじめてから、わずか三百年たらずの間に地球の様相は一変してしまいました。約四十六億年といわれる地球の歴史を考えれば、この間の変化がいかに急激なものであったかがわかるでしょう。たとえば、地球の全歴史を長さ四十六m（メートル）の年表に書き記しますと、三百年はわずか三mm（マイクロメートル）、つまり千分の三mm（ミリメートル）の長さにすぎません。

この間の「文明の進歩」の大きな原動力の一つは化石燃料ですが、それは同時に、地球の環境破壊の元凶でもありました。そして、「産業革命」以降の機械・物質文明の繁栄、経済成長は、その「元凶」に大きく依存して来たのです。「地球環境問題」は「文明の進歩」「経済成長」、つまりは「エネルギーの消費」と二律背反する問題です。

文明の利器に囲まれ、その恩恵に浴しつつ生きている人間は、安易に、感傷的に、そして無責任に、地球

1 - 7

にやさしく、環境にやさしく、などと叫ぶべきではありません。

⑥ 本来「地球にやさしく」生きようとすれば、私たちは原始時代の狩猟採取生活に戻らざるを得ません。しかし、それは現実的に不可能でしょう。結局、わたしたちが現在の「文明生活」を続けざるを得ないとしたら、まず己を知り、分をわきまえることが必要なのではないでしょうか。

また、「地球環境問題」が叫ばれている「いま」は、私たちが「本当の豊かさとは何なのか」を考え直すよい機会にも思えます。わたしたちが物質的な豊かさよりも精神的な豊かさ（豊かさ）に重きを置けるならば、結果的に私たちは、少しは、地球にやさしくなれるのです。

いま、私たちが、「地球環境問題」を「文明」の土台である「物質」と「エネルギー」に結びつけて、科学的に、総論的に考えることは、将来の地球のためにも人類のためにも決定的に重要なことなのです。

（志村史夫『環境問題の基本のキホン』より）

※（注）重量＝積み重なっていること。

急峻＝ここでは急激であるさま。

相乗＝いろいろな要因が重なって、掛け合わせたほどの大きになること。

薪炭＝たきぎやすみ。

契機＝ある物事を生じさせるきっかけ。

傲慢＝おごりたかぶってあなどること。

淘汰＝環境に適応するものが生き残り、そうでないものが死滅すること。

問一 線 a「サンセイ」 b「ノゾ」をそれぞれ漢字に直しなさい。

問二 A・Bに入るⅠ、Ⅱの内容をあらわすのに最も適当な題名を、次のア～カの中から

それぞれ選び、その記号を答えなさい。

- ア 将来の地球？
- イ 地球にやさしく？
- ウ 物質文明の危機
- エ 文明進歩の歴史
- オ エネルギーと地球環境
- カ 生態系と地球環境

1 - 8

問三 — 線①「不可避的に、自然環境を変えて来ました。」とありますが、なぜ「不可避（避けることができない）的」だったのですか。その理由として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 人類にとって精神的な豊かさを追求した結果、自然環境を変えざるを得なかったから。
- イ 人類にとって快適な生活を実現させるためには、自然環境を変えざるを得なかったから。
- ウ 人類にとって食糧危機を解決するためには、自然環境を変えざるを得なかったから。
- エ 人類にとって自然環境を変えるためには、結果として便利な生活を求めざるを得なかったから。

問四 — 線②「農耕牧畜革命」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「農耕牧畜」について筆者は別の言葉でどのように説明していますか。文中から十五字以内でぬき出して答えなさい。

2 「農耕牧畜革命」とは具体的にはどのようなものであったと筆者は説明していますか。文中から十五字以内でぬき出して答えなさい。

問五 1、2に入る接続詞として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア つまり
- イ しかし
- ウ そして
- エ また
- オ しかも

問六 次の一文がIの文章中からぬけています。本文に入る適当な箇所（かしょ）の直後の一文の初めの五字を答えなさい。（句読点・記号等は字数に数えません。）

じつは、このような化石燃料をエネルギー源としたことも、「産業革命」の革命性の重要な一要素でした。

1 - 9

問七 — 線③「そもそも、本来は、地球や環境に『やさしく』してもらわなければならない人間が、地球や環境に『やさしく』などというのは、分をわきまえない人間の傲慢にも思えます。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 筆者はこの後の部分でほぼ同様の主張をくり返しています。文中から一文でぬき出し、その初めの三字を答えなさい。（句読点・記号等は字数に数えません。）

2 ここで用いられている「分」と同じ意味のものを次のア～エの「分」の中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア この勝負は横綱に分がある。
- イ それは、わたしの分だ。
- ウ この分では相手に勝てない。
- エ 分に応じて要求すべきだ。

問八 3には身体の一部を示す言葉が入ります。漢字一字で答えなさい。

問九 — 線④「化石燃料」について、ここで筆者が考えている「化石燃料」の1プラス面と2マイナス面が具体的に述べられている箇所を文中から正確にぬき出して答えなさい。

問十 — 線⑤「地球は健康だったのです。」とありますが、別の言葉でわかりやすく言い換えるとうなりますか。答えとなる次の一文の に適当な表現を入れて答えなさい。（ただし自分でまとめた言葉をいれること）

「地球は健康だったのです。」とは、地球の自然環境が ということである。

問十一 — 線⑥「本当に『地球にやさしく』生きようとすれば、私たちは原始時代の狩猟採取生活に戻らざるを得ません。しかし、それは現実的に不可能でしょう。」とありますが、それでは私たちがどのようなになればよいと筆者は述べていますか。本文中から二箇所、それぞれぬき出し、解答らん「ようにならること」につながるように答えなさい。

問十二 この文章の内容に合うものを次のア～オの中からすべて選び、その記号を答えなさい。

- ア 人類はその歴史において、例外なく「文明」の恩恵を受けてきた。
- イ 物質文明の繁栄と経済成長は、化石燃料に大きく依存してきた結果である。
- ウ 私たちは「地球環境問題」を科学的に考えることがきわめて重要である。
- エ 今、地球が抱えているさまざまな環境問題は、人類にとってのみ深刻な問題である。
- オ 「農耕牧畜革命」は、私たち人類の生活と自然環境を急激に悪化させるきっかけとなった。

三 漢字や言葉のきまりに関する次の各問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを漢字に直し、⑥・⑦の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 明ロウな若者たち。
- ② あの人はオウジヨウぎわが悪い。
- ③ 祖母の病気がコウじる。
- ④ 版画をスる。
- ⑤ かれは昨今のセジにうとい。
- ⑥ 作者直筆のサイン。
- ⑦ 大水がひいて町は生色をとりもどした。

問二 次の①～③の反対語をそれぞれ漢字で答えなさい。

- ① 共用 ② 減退 ③ 派手

問三 次のⅠ・Ⅱの——線部①～④の中で読み方の異なるものをそれぞれ一つずつ選び、その数字を答えなさい。

- | | | | | |
|---|------|------|------|------|
| Ⅰ | ① 興奮 | ② 興亡 | ③ 興業 | ④ 興味 |
| Ⅱ | ① 下流 | ② 下水 | ③ 下位 | ④ 下等 |

問四 次の①～④の各文の中から、——線部「ない」の働きの異なるものを一つ選び、その数字を答えなさい。

- ① 今日は少しも寒くはない。
- ② あの山はそれほど高くない。
- ③ 何一つ楽しくないものはない。
- ④ 約束した時間に間に合わない。

問五 次の——線部「おそらく」が直接かかっていく部分を——線部①～④の中から選び、その数字を答えなさい。

- 人間はおそらく——①—— 一人だけで——②—— 生活していくことは——③—— できないだろう——④—— と思います。